

長沼氏への反論

東郷雄二

本誌に掲載された筆者の論文(東郷 2001)に対して、長沼氏が行なった批判(長沼 2001)に答えたい。長沼氏の批判は3つの部分に分かれているので、ここでもそれぞれについて反論する。

1. 指示説と存在前提説について

長沼氏は定名詞句の意味論において、「指示説」と「存在前提説」とを対立する説として立てるのは、「実際には存在しない *faux problème* である」としている。その際に、筆者が用いた「指示対象を同定する」とか「指示するものがどこかに存在する」という表現に含まれる「指示」という用語の使用が不適切であることを、その根拠のひとつとしている。確かに存在前提説に立脚する筆者が、「指示」という用語を用いることは矛盾していると見えるかも知れない。しかし、従来から名詞句の意味論そのものが「指示」を巡る問題として論じられており、*référent* の訳語として「指示対象」という用語が定着している以上、「指示」という用語を完全に放逐することは不可能である。用語の不適切さが混乱を生む可能性を認めた上で、この問題を単に用語上の問題に矮小化せず、理論的問題として論じることが必要であろう。

筆者は、「指示説」と「存在前提説」の対立は *faux problème* であるどころか、名詞句の意味論を考える上できわめて重要な問題だと考える。指示のプロトタイプは指さし行為である。この意味で典型的な指示を行なうのは、指示代名詞と指示形容詞句だけである。ここでは *ça / ce pull-over* は外延世界に同定できる対象物を「指示」している。

(1) a. *Donnez-moi ça.*

b. *Donnez-moi ce pull-over.*

しかし、定名詞句はこれと同じようには対象を「指示」しない。

(2) A : *Voulez-vous me passer le sel ?*

B : *Je suis désolé. Nous sommes malades du rein. Nous n'avons pas de sel sur la table.*

食事に招待された人が、食卓に塩があると思って塩を取ってくれるよう頼んでいるが、その家族は腎臓病なので食卓には塩がないという場面である。実際には食卓には塩がないのだから、*le sel* が塩を「指示」していると言うことはできない。にもかかわらず *le sel* は「存在前提」を持つ。それは「食卓にあるはずの塩」なのである。ただ、この場合、A の発話が想定する存在前提は、この家庭の事情により語用論的に満足させられなかっただけである。この語用論的事実は、A の発話において *le sel* が存在前提を持つという事実を遡

ってキャンセルすることにはならない。

また定名詞句は「存在前提」を持つが、固有名は「指示」を持つ。このちがいは次のような差を生じる。Prince (1978)の例である。

- (3) A : I can't decide what to get my wife for her birthday. What sort of thing do you usually get your wife?
B : Sorry I can't help you - I'm not married.
- (4) A : *Harry Edelson* told me about a great restaurant.
B : There is no such person as Harry Edelson.

Prince は(3) の対話は自然であり、日常起きることだとしている。your wife という所有形容詞句は、定名詞句と同様に存在前提を持つ。A は B が結婚しているものと思って発話しているが、実際には B は独身なのである。これは上に見た塩の例と同じである。一方、(4) は不自然であり、どちらかが妄想を抱いているとしか思えない対話である。Harry Edelson という固有名は、「存在前提」を持つのではなく「指示」しているからである。「指示」しているものが実際には存在しないというのは、日常よく起きることではない。この例文の異常さはひとえにこの点に由来する。以上考察したように、「指示説」と「存在前提説」は、決して単なる用語上の問題ではなく、固有名まで含めた名詞句の意味論にとっては重要な区別なのである。

2. 「半内包的」用法について

Furukawa & Naganuma (2000) で半内包的用法とされている *J'ai abîmé l'aile de la voiture* の例について、筆者は「外延的でありながら内包が前面に出るとしているのはおかしい」と批判した。長沼氏はこれに対して、筆者の批判はレベルの混同によって生じているので、「外延的であるのは定冠詞のレベルであり、内包が関わっているのは名詞のレベルである」と反論している。

しかしこの反論には不可解な点がある。まずあらゆる名詞句の指示において、名詞の内包が関わっているのは自明である。名詞の内包が関わらない名詞句の指示など存在しない。従って、長沼氏の言うように、*l'aile de la voiture* で、名詞 *aile* が内包を指示し、定冠詞 *la* が外延的に用いられているとすれば、これは半内包的用法などではなく、完全に外延的用法になってしまう。

Furukawa & Naganuma (2000) で *l'aile de la voiture* 型の指示について提案されている図式は、次のふたつのうち b. である。

- (5) a. LE être-N + de + dét. N
b. LE (x qui est) N + de + dét. N

a. は内包指示を表し、b. は外延指示を表す。b. で LE は N という記述を満足する個体 x をさすとされている。では、どうしてこれが定冠詞の「半内包的」用法になるのだろうか。長沼氏は自動車のフェンダーという「4 つある個体が全て同形であるため、区別する必然

性がない」ので、「内包が前面に出てくる」と説明している。しかし、なぜ個体を区別する必然性がないと内包が前面に出てくるのか、これだけの説明では明らかではない。定冠詞 *la* が「外延を指示する」としている以上、それがさすものは外延の世界に求められるはずだからである。これは定冠詞に「指示」機能を認める立場から必然的に帰結する矛盾である。定冠詞は対象を「指示」するのではなく、「存在前提」を伝達するという立場ではこのような矛盾は生じない。

3. 値踏み場について

Sonnez. Le boucher vous conseillera. について筆者が行なった分析について、長沼氏は次のように批判している。曰く、この分析では *le boucher* がなぜ単数形であるかは説明できても、なぜ定冠詞が用いられるのかを説明できていない。しかし、この批判は当を得ていない。なぜならば、定冠詞は *Sonnez.* によって開かれた値踏み場に *boucher* が唯一存在するという前提を伝達しているのであり、これは定冠詞の存在前提説の直接の帰結だからである。従って、これは *le boucher* でなぜ定冠詞が用いられるのかを説明していることになるのである。

また長沼氏は、筆者の分析では *le boucher* は客が呼び鈴をならすたびごとに変化する肉屋の「値」を同定していることになるが、ここでは「役割」が同定されていると考えるべきだと述べている。この点について考えてみたい。

まず筆者の分析だと、*le boucher* は値を同定することになるというのは誤解である。「役割」と「値」はメンタル・スペース理論の概念で、*His girl friend is always different.* という文で、*his girl friend* を役割と解釈すると、彼は女の子をとっかえひっかえするという意味（つまり役割 *his girl friend* はそのたびに異なる値を持つ）であり、値と解釈するとひとりの女の子が髪型や服装を頻繁に変えるという意味になる。つまり名詞句の値解釈では、特定の個体を指示するのである 1)。

ところが、*Sonnez. Le boucher vous conseillera.* では、筆者の分析においても、*le boucher* は客が呼び鈴をならすたびに異なる値をさしているのではない。ここで値となりうるのは、この文の舞台であるスーパーマーケットの肉売り場で働いている 6 人の肉屋であるが、*le boucher* はこれらの肉屋をかわるがわるさしているのではない。*le boucher* は、*Sonnez.* という命令形が開く値踏み場（すなわち客であるあなたが肉を買う場面）において、唯一の肉屋の存在が前提されているという情報を伝達しているだけである。実際に呼び鈴を鳴らすと、応対する肉屋が A 君であったり B 君であったりするの、語用論的問題にすぎない。従って筆者の分析では *le boucher* が「値」をさすことになるという指摘は誤解である。値は値踏み場でではなく、発話の場でのみ決定することができる。

では *le boucher* は「役割」をさすという点はどうだろうか。筆者は問題の例の分析において「役割」という概念を用いてはいないが、これは考察する価値のある問題である。

筆者が *Functionals* と分類し、浅い同定のケースとした次の例は、メンタル・スペース理論でいう役割と類似した性質を示す。

- (6) a. *Est-ce que le facteur est passé ?*
- b. *J'ai amené ma voiture. Voulez-vous réparer le carburateur ?*

a. では今日の郵便配達係が **Jean** なのか **Philippe** なのかという個体情報は関与的ではない。このように値を問題にしないという意味では、これは役割名詞句と類似している。またこのような定名詞句の用法は、b. の示すように連想照応とも類似している。b. の例では **ma voiture** → **le carburateur** という連想関係が成立しており、ここでも **le carburateur** についての個体情報はその同定に必要ではない。

しかし、重要なちがいもある。His girl friend is always different. で his girl friend を役割解釈すると、「彼のガールフレンドという役割には、いつでも異なる値が与えられる」というくらいの意味になる。つまりここで役割とは、異なる値を代入することができる空の座席なのである。しかし、次の例で the driver は空の座席ではない。Functionals は浅い同定であり、個体情報を必要としないが、だからといってその記述に該当する個体が一義的に決まることを否定しているわけではない。

(7) I had to get a taxi from the station. On the way *the driver* told me there was a bus strike.

Sonnez. Le boucher vous conseillera. の例では、確かに客が呼び鈴を鳴らすたびに応対する肉屋は異なる個体でもよいので、His girl friend is always different. との類似から、le boucher を役割と見なしたくなるのも理解できないではない。しかし、これは異なるタイプの同定である。肉屋の例は定名詞句の所謂「外部指示用法」の Attention à la voiture! と同じタイプに属する。ここでは la voiture を役割と見なすことには無理がある。la voiture にその都度異なる値を代入することができるわけでもないし、その場面で値が決まっていなくてもない。今にも歩行者をはねようとしているのは、特定の一台の自動車なのである。しかし、この発話においてはその値の個体情報は必要ではないだけでなく、邪魔なものである。歩行者が横断しているという局所化された値踏みの場合に、唯一の車の存在が前提されるだけで十分なのである。この la voiture を「役割」と分析することはできない。よって、長沼氏の提案しているように、le boucher もまた役割と分析することはできないと考えざるを得ないのである。

(京都大学)

【注】

1) En France, le chef de l'Etat est le président de la République. では、le chef de l'Etat が役割、le président de la République が値であるが、後者は特定の個体をささない解釈が可能である。このようにコピュラ文では、値が特定の個体をささないことがある。

【参考文献】

Furukawa, N., Naganuma, K. (2000): « A propos de l'emploi 'quasi-intensionnel' de l'article défini : la copie du dessin et a copy of the drawing », Actes du XXIIe congré international de linguistique et philologie romanes, vol. II, Sens et Fonctions, Max Niemeyer Verlag, 243-250.

東郷雄二 (2001) : 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」『フランス語学研究』35号, 1-14.

長沼圭一 (2001) : 「定名詞句の解釈をめぐって」『フランス語学研究』35号, 56-61.

Prince, E. F. (1978) : "On the function of existential presupposition in discourse", *CLS* 14, 362-376.